

コミュニティ・スクールの導入に向けた学校内外の連携体制の構築  
－関係者の共通理解と当事者意識の醸成を通して－

内藤裕之

(教職リーダーコース E203C006)

## I 研究の背景

### 1 コミュニティ・スクール制度の発足

コミュニティ・スクールは、2004（平成 16）年の「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正により、制度が発足した。2017（平成 29）年、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の再度の改正においては、教育委員会にとって、学校運営協議会の設置が任意から努力義務に変更された。

### 2 コミュニティ・スクールにおける課題

コミュニティ・スクールは、「地域とともにある学校」への転換を図るための有効なしくみ」として構想されており、学校と地域住民が力を合わせて学校の運営に取り組み、学校運営に地域の声を生かし、地域と一体となって特色ある学校作りを進めていくことができるとされている。ただし、これらのメリットはコミュニティ・スクールを導入すれば自動的に実現するというものではない。

### 3 館林市におけるコミュニティ・スクールの導入状況

勤務校である館林市立第一小学校が所在する群馬県館林市のコミュニティ・スクール推進計画によると、2022（令和 4）年度に市内の小中学校合わせて 16 校全てがコミュニティ・スクールとなる。各校に学校運営協議会を置くとともに、中学校区単位での連携を進める計画になっている。

## II 研究の目的

研究の目的は「コミュニティ・スクール導入に向けて、教職員、保護者、地域住民との熟議を通して、コミュニティ・スクールの活動内容を明確にし、理解を促すことでコミュニティ・スクールを支える連携体制を構築する」こととする。

熟議とは、「多くの当事者（保護者、教員、地域住民等）が集まって課題について学習・熟慮し、議論をすること」であるが、本研究では育てたい児童像や学校・地域の課題、教育活動などについて、小さなグループでの話し合いを多く重ねていくことが、やがて熟議になっていくと捉えていきたい。

実効性のある構想作りとしては、連携体制を構築していきたいと考えるので、実際に効果や影響をもたらすために、教職員、保護者、地域住民が協力してどんな活動を行っていくことができるのかを示していく。（以下 CS はコミュニティ・スクールの略）。

本稿は、2022（令和 4）年 4 月の CS 本格始動にむけた前年度の準備の実践記録として、今後、CS 導入をしていく学校の参考となることを目指す。実践を行った 2021（令和 3）年度は、前年度からのコロナ禍の影響が継続し、保護者・地域住民との対面での会合がほぼ不可能な状況であった。その状況に即してどういう取組を行い、成果

物（たより、動画、実践）を生み出したのかを提示する。

### Ⅲ 研究の内容

#### 1 2021年度の実践内容

前年度に一定の準備を進めていたが、依然コロナ禍であるために、対面での会合や企画が制限された中での着手となった。その中で以下の取組を実施した。それに当たっての筆者の校務分掌は、教務主任兼学校支援センター（CS準備）担当である。

##### （1）学校ホームページの活用

###### ①CSについての情報発信

関係者の共通理解の形成のため、CS通信（No.1からNo.8）を作成した。コミュニティ・スクールの説明を中心に、質問への回答という形で学校HPに掲載した。

###### ②動画の公開

コロナ禍が2021年度も継続したために、対面での説明に替わる手段として、コミュニティ・スクールの解説動画を2本作成し、学校HPで公開した。

1本目は、コミュニティ・スクールとはどのようなもので、保護者や地域住民にとってどんな意義があるのか、Q&A形式で紹介した。

2本目は、校長の構想を聞く形式で作成した。具体的にどう変わっていくのかについて、方向性を含めてインタビュー形式で作成した。

##### （2）部会の開催

###### ①学校支援センター部会

校内教職員の共通理解や当事者意識を醸成するための活動として、まずは、1学期（6月9日）に学校支援センター部会を開いた。参加者は、筆者を含め、学校支援センター部員8名（各学年1名と特別支援から1名）である。

コロナ禍の中においても、ボランティアの方に入っただけの活動はないか、アイデアを出しあった。今後の方向性としては、毎月の学校だよりや学年だより、各学年でお願いしたいことがあるときに活用していく「来月のボランティア募集」枠を設けていくこととなった。

###### ②総合部会（総合的な学習の時間の見直し）

2学期に第2回目の学校評議員会が開かれた。そこでの話し合いに基づき、職員会議（11月8日）において校長から「地域に開かれた教育課程編成に取り組む」という提案があった。これを受けて、次年度の総合的な学習の時間の年間指導計画作成に向けて、教務主任として総合部会を開催した（11月11日）。学年間のつながり・発展性としては、学校の周りの施設→市内の文化財や行事→市内の特産物や景勝地→市全体をアピールする発表会といった大まかな系統ができあがった。

##### （3）資質向上研修

コミュニティ・スクールについての理解を深めていくために、コミュニティ・スクール研修を組み込んだ。2021年10月11日にコミュニティ・スクールの研修会として、第四小・第五小のCSディレクターの泉田一美氏（元第四小学校長）に講師をお願いして、たくさんの事例をお話いただいた。家庭科でのミシンの授業では、ボランティアがいることで先生はゆとりをもって支援できることや、委員会活動では地域の方た

ちと花壇作りをしていることなど、勤務校の教員に CS を可視化できた研修となった。

#### (4) 地域、保護者との関わり

##### ①公民館活動推進委員会

第一小学校区を含む地域を管轄する中部公民館の活動推進委員会の会議(6月13日)に参加し、CS についての法的な説明や館林市の CS 導入計画について説明した。さらに、地域学校協働活動についての説明、学校から保護者や地域の方と関わりたい教育活動についても話を付け加えて説明を行った。

##### ②学校評議員会

###### (a) 第1回(一学期)

一学期の学校評議員会(7月7日)に参加し、コミュニティ・スクールの意義や学校運営協議会の権限等について説明を行った。参加者は、次年度の学校運営協議会委員への就任を見据えて4月に校長から委嘱された学校評議員の10名と校長、教頭、筆者である。終了後に、校長、教頭と振り返りを行い、翌年からの学校運営協議会の方向性として、様々な立場から意見をもらい、力を借りるといったスタンスで臨むことを共通理解することができた。

###### (b) 第2回(二学期)

第2回学校評議員会は、評議員8名(2名欠席)、校長、教頭、筆者で行われた。

初めの校長挨拶で、「CS を見据えた委員であること」、「その委員の皆さんから、学校に関する問題や課題について意見を頂戴したい思い」であることが話された。それから、協議の前に一小の CS についての方向性として、評議員に対し、「学校と地域で目標・願いを共有し学校課題を解決したい」、「地域にある有益な物を掘り起こし、それを地域に還元するようにしたい」といったことを訴えた。このことについて、グループに分かれ協議した。地域住民でもある評議員の率直な声を聴くことで、第一小学校としての CS の形を明確にするための一歩が踏み出せたと考えられる。

##### ③洗濯実習

6年生の家庭科の授業で6月頃に洗濯の実習を行うことを聞いたので、ボランティアの協力を依頼してみてもどうかと、家庭科担当に提案した。家庭科担当者は当初は、ボランティアの必要性を感じていなかったようだが、ボランティアがいることで、ゆとりをもって児童への支援ができたと話していた。今後の取組として、家庭科の指導計画に、ボランティアの活用を来年度以降に組み入れていくこととして、年間計画にその旨朱書きで加えた。

##### ④市役所職員との情報交換

筆者が CS について取り組んでいることを中部公民館の館長より伝え聞いた市職員から、「CS に取り組んでいる先生と話してみたい」という連絡があり、オフィシャルなものではないが、情報交換の機会がもてた(10月14日)。今後、実際に協力を依頼する際には、市の職員の方が仲介役もしてくださるとのことで、大変心強い人脈をもつことができた。

## 2 検証

本研究は主として、CS の準備過程について詳細な報告を行うことで、これから CS

に移行しようとする学校等の取組に資することを目的としているが、補助的に、実践の成果について、以下の形での検証も実施した。

(1) 学校評価の活用

まず、保護者アンケートについて、2020年度、2021年度の結果を示す(表Ⅲ-1、2)。

表Ⅲ-1：2020年度保護者アンケート  
より「地域連携」関連項目

保護者 【家庭・地域連携】	
通信等で様子がわかる	95%
学校と連絡を取り合う	87%
PTAや地域の行事、学校での活動に参加している	78%
子どもは地域や公民館の活動に参加している	47%

表Ⅲ-2：2021年度保護者アンケート  
より「地域連携」関連項目

保護者 【家庭・地域連携】	
各種通信や連絡帳などで、学校の様子を分かりやすく伝えている。	91%
お子さんのことで教育相談や日頃の連絡を通して、保護者との連携に努めている。	90%
授業参観や学校行事、PTA活動や地域の行事、公民館の活動などに参加している。	81%
学校ホームページ(学校の様子やコミュニティ・スクール通信など)を見ている。	57%

学校の様子や連絡等の数値は高い数値を示しているため、学校と家庭の連携は良好といえる。また、コロナ禍がやや落ち着いてきた時期であったため、地域や公民館への行事の参加も前年度に比べ、高まってきた。

しかしながら、「学校ホームページ(学校の様子やコミュニティ・スクール通信など)を見ている」の項目は57%の数値である。この結果を受け、学校だより、学年通信等において気軽にHP・動画を閲覧・視聴できるようにQRコードを作成し掲載することとした。

次に、教職員アンケートの「家庭・地域連携」関連の2020年度、2021年度の結果(表Ⅲ-3、4)を比較する。

表Ⅲ-3：2020年度教職員アンケート  
より「地域連携」関連項目

教職員 【家庭・地域連携】	
ボランティア組織を充実させている。	60%
学級・学年懇談を充実させている。	32%
情報を発信し、学校評価を生かしている。	96%
コミュニティ・スクールの背景と価値を理解し、準備を進めようとしている。	69%
児童に対し、地域の行事等への参加を促している。	27%

表Ⅲ-4：2021年度教職員アンケート  
より「地域連携」関連項目

教職員 【家庭・地域連携】	
保護者や地域に対して、授業公開や学校行事などに参加してもらえるよう努めていますか。	100%
外部の力を活用するために多様な場面で協力依頼をしようとしていますか。	86%
地域の人々との交流を大切にしようとする児童を育てるための活動を取り入れていますか。	68%
コミュニティ・スクールの背景と価値を理解し、準備を進めようとしていますか。	79%
児童に対し、地域の行事等への参加を促していますか。	50%

教職員の家庭・地域連携の項目には、2020年度からコミュニティ・スクール導入を視野に入れた項目を追加した。「コミュニティ・スクールの背景と価値を理解し、準備を進めようとしていますか」は、2021年度には前年度の69%から79%に向上した。少しずつ浸透してきていることが分かる。また、「児童に対し、地域の行事等への参加を

促していますか」では、27%から50%に向上している。コロナ禍が落ち着いてきたこともあるが、校内教職員に少しずつ意識してもらえるようになってきたことの成果でもあると考える。

## (2) 成果物

準備段階において、どこまでのことができたのか、校内体制や具体的な取組についての、他校にも参考になるような成果物を示すことも、本研究の重要な検証となると考える。

CSを教職員や保護者、地域の方に周知する方法として、学校HPを活用したことは、今後、CSを導入していく学校にとって参考となる成果物になった。また、学校支援センター部会や総合部会を開催したことは、教員に当事者意識をもってもらうためには、必要不可欠である。教員間で話す場を設定することは、お互いの考えを伝え合うのによい機会となる。

## IV 成果と課題

### 1 研究の成果

コロナ禍ということで、本来一番必要な、一堂に会した対面での説明や話し合いを行うことができなかったが、コロナ禍だからこそ、新たな道が開けた。

まずは、ホームページの活用により、CS通信やインタビュー動画を作成しアップしたことは、校外の方たちに広く周知することに有効であり、いつでもどこでも説明できる準備は整ったことになる。

次に、学校支援センター（CS準備）部会や研修会の開催をしたことは先生方に当事者意識をもってもらうためのよい機会となった。では、実際にどんな活動をするか、当事者意識がより高まることになるのかということについて、開かれた教育課程に向けて総合部会（総合的な学習の時間）を開催した。地域の学習を取り入れることで、地域との関わりをすることになる。それを共通理解したことにより来年度の年間指導計画を作成するには、よいタイミングとなった。

これらのことにより、関係者の共通理解と当事者意識の醸成をし、円滑なコミュニティ・スクールへの移行ができるのではと推察される。

### 2 課題

ホームページを利用したCS通信やインタビュー動画の発信をしたが、閲覧の案内やアピールが足りていないので、通信や動画の存在を広く、あらゆる場所で宣伝していくこと必要になる。これからは、QRコードを作成して、通信等に載せていくことにも力を入れていく。

## V 引用・参考文献

小西哲也・中村正則（編著）（2019）奇跡の学校ーコミュニティ・スクールの可能性ー。

風間書房。

佐藤晴雄（2017）コミュニティ・スクールの成果と展望。ミネルヴァ書房。